私の心に身体に
〃疲れ〃をもたらすだらうことを
君は知るまい……
友よその言葉は使はないでくれ

熊延線にて

廣い稲田は
うすい暮色におほはれ
冷たく寂しかつた
ゆるくカーブして
稲田に消えてゐるレールが
淡い夕陽に
にぶく光つてゐた
沈んだ寂しい色だつた
ガソリンカーが
暮色の中を突き進んで行く

一人のまだ小さい女の子が
赤い模様のおべゝにくるまつた
幼な兒をシツカリ抱き
窓に背をすりつけ
動搖に耐へてゐた
幼な兒の小さいお手ては
シツカリと
女の子の水兵服の胸邊を握りしめ
澄んだ小さな瞳が
パツチリみ開き
ぢつと女の子を見上げてゐる
あのおてゝ
あのひとみ
何といぢらしい
何と小さな

懸命の努力だらう！
……
一人の教師がその女の子に席を與へた
私は
ひざにだかれた幼な兒のお顔を
ぢつとみ入つてゐた……
チラツとまぶたがとぢ
パチリと開く
パチリと開いて
又とざされる
幼な兒はねむたいのだらう
……
開いては
ぢつととざされて行く
そしてぢつと開いて
安らかに靜かに

とざされて行つた……
幼な兒の小さなまぶたは
固く／＼とざされてゐた
口のあたりがピチと動く……
何と安らかな靜かさだらう
幼な兒は
もうねむつてゐるのだ
重たげにおつむがあふむけに下る
そして今一段
まぶたが固くとざされるやうに見えた
あの小さな
可愛いゝおてゝが
あのまゝ落ちてゐる……
私はぢつと
幼な兒の顏を見下してゐた
樂しい幸福につゝまれて——。